



Title	和楽器の持続可能性 : KOGEI Next 監修エレキ三味線 《Lycoris》の制作を通して
Author(s)	前崎, 信也; 田畑, 絵梨奈
Citation	デザイン理論. 2024, 83, p. 114-115
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/93441
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

和楽器の持続可能性

KOGEI Next 監修エレキ三味線《Lycoris》の制作を通して

前崎 信也 京都女子大学

田畑 絵梨奈 京都女子大学大学院在学

はじめに

和楽器（邦楽器）は歌舞伎や文楽、日本舞踊など多くの無形文化財に欠かすことのできない道具である。しかしながら、その生産数は昭和の半ばから減少を続けている。例えば1970年に年間18,000丁あった三味線の生産数は2017年には3,400丁に、箏も同様に25,800面から3,900面まで減少している（全国邦楽器連合会調べ）。更に、2019年からの新型コロナウイルスの流行により、芸能分野では公演中止が相次ぎ、すでに高齢化が問題となっていた生産者の廃業や演奏家の引退が増加した。流行の終息後もその生産数が回復することは見込むのは難しく、存続が危ぶまれている。

本研究の目的は、日本の伝統楽器の中でも特に三味線の生産や販売に関する現状を把握すること。そして、楽器としての機能を損なわずに、素材やデザインを新しくした三味線を実際に制作した事例を通して、三味線を含む邦楽器の変革に必要な条件を検討することである。

伝統的工芸品との比較

生産数が1970年代にピークを迎えて以来、減少を続けていることに加えて、職人の高齢化、材料や道具の枯渇といえ、発表者が専門とする伝統的工芸品の分野で長年議論されてきた課題である。本研究では、伝統的工芸品が抱える課題と三味線業界が抱えている課題はほぼ共通することを確認することができた。同時に、三味線を含む和楽器は伝統工芸品よりも克服困難な課題を抱えていることも判明した。

楽器は需要の減退に対する対応が伝統的工芸品に比べて困難であると言える。なぜなら、伝統的工芸品に指定される基準とは①主として日常生活の用に供されるもの、②その製造過程の主要部分が手工的であるもの、③伝統的な技術又は技法により製造されるもの、④伝統的に使用されてきた原材料が主たる原材料として用いられ、製造されるもの、⑤一定の地域において少なくない数の者がその製造を行い、又はその製造に従事しているもの、とされている。この基準の中には、日常生活の用に供される限りは、一部の品目を除いて、どのような製品を製造すべきかという決まりはない。つまり、伝統的な工芸品を現代の人々の生活習慣に合わせた製品につくりかえることについて厳しい規制はなく、新製品の開発については補助金の対象となることもある。

一方、和楽器は伝統芸能の道具として、伝統的な音を奏で続けることが至上命題である。そのため、社会の変化に合わせて新製品を開発するという選択肢はほぼ存在しない。言い換えれば、同じ楽器を同じように造り続けなければならない、時代や社会の変化に合わせて変わることはできないということだ。これは和楽器産業復活の方法が演奏者を増加させる以外にないことを意味している。

この問題は和楽器業界に対する国の支援の在り方とも繋がっている。和楽器は経済産業大臣が指定する伝統的工芸品ではなく、文部科学省の管轄する無形文化財の道具としての支援がなされてきた。そのため、無形文化財の振興という意味での芸能公演や演奏会の支援、もしくは教育現場にお

いて日本文化としての和楽器の普及が主なものとなっている。しかしながら、演奏者は思うように増えず生産数が減少の一途を辿り、2020年に業界最大手の三味線メーカーである東京和楽器が倒産の危機に陥ったことで、和楽器業界の苦境がようやく社会的に認知されることとなった（『日本文化の危機、三味線の最大手「東京和楽器」が廃業へ」『東京新聞』2020年6月28日）。これらの状況を受けて、2022年に「東京三味線」と「東京琴」が経済産業大臣から伝統的工芸品に指定された。産業の振興という観点からこれまで以上の国の支援は受けられるようになったが、時代に合わせて変わることが困難であるという和楽器特有の課題がある限り、劇的に状況が改善する可能性は低いと言わざるをえない。

さらに三味線に特徴的な問題として、絹弦を除く製造に必要な素材のすべてが伝統的に輸入品を使用しており、年々輸入が困難となっていることがある。まず木部は主に3種類の木材（紅木・紫檀・花梨）が使用されている。天神や棹に使用される紅木はインド産が中心であり、ワシントン条約に指定され国際取引に規制がある。現在は以前国内に輸入された在庫を使用しており、当分の在庫は確保されているとのことだが、輸入する必要が生じたときにそれが可能かどうかはわからない。

糸巻に使用される象牙、撥に使われる象牙・鼈甲はどちらもワシントン条約で国際取引が禁止されている。これも国内に十分な在庫があるとされているが、倫理的な観点から近い将来に象牙・鼈甲の使用の継続が困難になることも考えられる。そして、三味線の胴には猫・犬・カンガルーなどの皮が使用される。海外からの輸入に頼っているが、動物愛護の観点から年々使用が困難となっており、近い将来に代替素材が必要となるだろう。

伝統的な素材を使い続けることに固執すれば、これらの素材の国内在庫がひとつでも枯渇し、輸入が不可能となったタイミングで日本の三味線製造は停止してしまう。さらに時代にそぐわない素

材の使用継続が今後いつまで可能なかという議論も避けて通ることができなくなるだろう。

KOGEI Next 監修 エレキ三味線《Lycoris》

このような課題を知り、京都女子大学前崎研究室では、2021年からKOGEI Nextプロジェクトの一環として三味線プロジェクトを開始した。KOGEI Nextは自然環境や社会課題との関わりを通じて工芸の次の姿を提案・実現させようとする運動であり、京都女子大学前崎研究室は同プロジェクトのパートナーである。

三味線プロジェクトは大学生の発案で始まった。三味線の演奏者を増やすためには、三味線に興味をもつ若者が増えることが大切であり、そのためにはこれまでにないデザインの三味線を有名音楽アーティストが演奏することが必要という思いから始まった。

和楽器バンドの蜷川べに氏専用のエレキ三味線を蜷川氏と共にデザイン。人工皮、人工宝石、都市鉱山由来の金など、できるだけ環境に配慮した素材を使用した三味線の制作に取り組んだ。2022年秋に完成した蜷川べに専用津軽三味線《Lycoris》は結果として、楽器の音を損なうことなく、前例のない外観を持った三味線の実現に至った。このプロジェクトの詳細については、本誌掲載の田畑・前崎のパネル発表要旨「津軽三味線と漆芸の融合」を参照いただきたい。

おわりに

本研究と《Lycoris》の制作プロジェクトを通じて、和楽器生産の継続の障害となるいくつかの楽器特有の課題の存在が明らかとなった。同時に全国邦楽器組合連合会の方々の、和楽器の普及に向けた熱心な活動についても知るところとなった。今後も引き続き、日本文化を支えてきた音を大切であると思う人々と共に、和楽器の明るい未来のために検討と挑戦を続けていく予定である。